金沢星稜大学人文学研究，第 9 巻第 1 号，pp.79–97，2025年

The Incorporation of Art Making into the University Curriculum: A Case Study of a Course entitled “Art and Culture”

MONZEN Ayaki†, SAKURAI Asumi‡

Abstract

This paper reflects on the practice of art making in a class called “Art and Culture,” a specialized course in the Faculty of Humanities of Kanazawa Seiryo University in the 2023 academic year. In this course, students experienced art making (finger painting, frottage & collage, and installation) in the 5th through 7th sessions. In the 12th and 13th, a visiting artist gave lectures (online lecture and production in the atelier). This paper discusses the significance of art making through the reactions of the students in class activities.

Keywords

Art making, Arts-Based Research, Insights through making, Corporeality

総合大学の授業におけるアート制作の意義：2023年度「Art and Culture」の実践を通して

門前　斐紀†，櫻井　あすみ‡

キーワード

アート，制作，アートベース・リサーチ，制作的な思考，身体性

1. 目的と課題

本稿は，金沢星稜大学人文学部専門科目「Art and Culture」（2023年度）の制作回の実践を省察し，総合大学の科目にアート制作を導入する意義について考察する(1)。

2023年度「Art and Culture」の一部は，2023年度学内共同研究「Arts-Based Researchを共通基盤とし，非芸術系大学における科目にアート作品の制作を取り入れるための学際的研究―芸術学・教育学・哲学の観点から―」（櫻井あすみ，三好風太，寺嶋雅彦，門前斐紀，研究代表者：寺嶋雅彦）との関連の下で実施された。本共同研究は今年度も継続中であり，Arts-Based Research（以下ABRと記す）に依拠し，総合大学の授業にアート制作を導入する際のモデル―「学部専門科目用モデル」「全学教養科目用モデル」「ゼミ科目用モデル」の 4 つのモデル―を提起することをめざしている(2)。共同研究者で

† monzen@seiryo-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryo University)
‡ asumi@edogawa-u.ac.jp (Edogawa University)

本稿の筆者でもある櫻井は日本画，三好は現代美術を専門とし，ともに美術教育に携わっている。そこで，本研究・本稿における「アート」は主に美術制作を指す。

本授業のシラバスは，2022年度以前の担当者（門前）による構成を，共同研究との関連を踏まえ発展させたものである[(3)]。ABRの枠組みの下，学生が手や身体を動かして表現する体験を重ね，アート制作の感覚や体感を授業内で共有する点を重視した。なお，本研究･本稿は，アート制作に伴う，科学的・論理的思考とは異なる質の思考や探究のあり方に注目し，ABRを「アート作品の制作とその制作に基づく省察を含み，研究方法論としての側面に加え，教育的実践としての側面も持つ方法論的枠組み」と捉えている（寺嶋,2025:28）。

ABRとは，笠原広一らの研究によると，「探究的で創造的なアートの特性に着目し，アートの表現活動や作品制作を通して物事の新たな理解や意味を生み出していく新しい知の創出やリサーチの考え方であり方法」と定義される（笠原, 2022:19）。さらに詳しい理解としては，「人間存在の美的・感性的な側面を捨象することなく，感性的な認識にまつわる技術として，アートを物事の理解や意味の創出に生かしていこうとする，アートであり，かつリサーチでもあるような考え方であり実践と研究のアプローチ」と説明される（同上書:20）。

アート・芸術と教育・人間形成の接点は，教育学研究の重要テーマの一つである。小松佳代子は，芸術大学・大学院の学生やアーティストとの共同研究をもとに，作品制作，美術教育，理論研究の3つの立場を往還する「アート研究としてのABR」を展開している。小松は，美術制作が独自に涵養し得るものを「芸術的知性」という言葉で把握し，「目的や意味が明確ではない状況で，素材や環境や他者，つまり世界と向き合い，自らの表現を生み出していく」ような学びの在り様に注目している（小松, 2023: 32）[(4)]。

また，今井康雄は，小松らとの共同研究を通し，「対象の意味がまだ確定していない状態，そこに何かがあることは予感されるが，それが何であるかはまだわからないといった状態」にある「曖昧な中間状態にある対象」を「モノ」（Ding）と捉え光を当てる。モノは，日常的な活動の背景に溶け込んでほとんど意識されない状態にある「コト」「事物」（Sache）と対比的に区別される。そのうえで，美術教育のフィールドワークを通して，意味づけされる以前のモノとのかかわりがもつ教育的意義を探究し，子どもの表現活動が「世界へと向かう生き生きとした関心」を培うための理論的考察を重ねる（今井,2021:2-3, 5 ）。

さらに西村拓生は，F.シラー『美育書簡』の論述から導き出される「美的なもの」への問い―はたして，「美」はそれ自体が目的なのか，あるいは人間性・道徳性の前段階としてのプロセスなのか―に関する後世の思想家の解釈を読み解く。そして，芸術や美的体験の議論を教育や人間形成へ接続する際に，美の仮象性や多元性を容易に道具的に語るのではなく，美と教育をめぐる「豊かでかつ危うい，一筋縄ではいかない重層性，複雑性」に留意する必要があることを指摘する（西村,2021:10）。

また，渡辺哲男は，領域横断的な共同研究をもとに，学校教育における「言語活動の充実」の課題性を，「言葉とアートを『つなぐ』」という立場で検討する。「論理的思考」や「プログラミング的思考」の涵養とは別の角度から，単にわかりやすい話し方やまとめ方としては形式化されない言語活動の可能性を展望する試みである。そして，言葉にならないものが言葉になっていく過程や，言葉が起ち上がる過程が，固有で多様な経験を語ることのできる言語活動の充実化につながることを指摘する（渡辺, 2019: 8 ）。

そして，髙橋憲人は，生態芸術論に基づく美

術教育研究において，社会人類学者T.インゴルドの「織地性，テクスティリティ」(textility) を手がかりに，世界の「肌理」(texture) と「ざらつき」(grain) にアプローチする制作的な芸術教育プログラムを展開する。ここでは，インゴルドの制作論に基づき，「絶え間なく変化する素材の流れに応えながら，自身がつくりつつあるモノとともに前へ進み続ける」という人間の在り様が焦点化される（髙橋,2022:114-115)。

以上のような美（術）と教育をめぐる先行研究を踏まえ，本稿は，第 5 ～ 7 回の実践省察のポイントを以下 3 点とする。①一定の目的性や既存の概念から自由に，出来事の過程や素材の性質に沿って行く即興的な側面，②身の回りのモノ・環境・世界と探索的に関わり，その質感や肌理を発見する側面，③言語活動以前の行為や成果物を介し，感覚の変化や独自の身体性に気づき，自他理解を深める側面。これらの点は，アトリエ等における純粋な作品制作ではなく，授業中に他の受講生とともに制作的な活動を行い，それを通して他者と関わりつつ科目を学ぶという，授業アート特有のコミュニケーションの特色を探る観点となる。

以下本稿は，第 2 章で専門科目「Art and Culture」の概要を紹介し，第 3 章で授業担当者である門前の実践について，上記①～③の観点から省察する。続いて第 4 章では，授業の後半に 2 回連続で実施した櫻井による特別授業を省察する。ここでは共同研究の一環として実施した事後アンケートと，学生の回答を交えて考察する。そして，第 5 章で，本授業にアート制作を導入したことの意義と本研究の今後の課題点，アートを大学授業に導入する際の留意点等を明らかにする。

2. 専門科目「Art and Culture」の概要

■開講時期・時限

2023年度前期 4 月～ 7 月，金沢星稜大学人文学部・専門科目として開講

毎週金曜 2 限（10：35～12：05）

■履修生

金沢星稜大学人文学部 3， 4 回生，留学生（計36名、うち留学生 6 名）

■授業目標

「The purpose of this course is to cultivate your senses beyond words to promote new cultures and fresh ways of views through art exercises.」（シラバスより転載）

本授業は，人文学部国際文化学科の専門科目に位置づけられている。受講生の多くは留学や海外生活，異文化交流への関心が高く，ほとんどの学生は 1 年生の後期から 2 年生前期の期間に短期留学を経験している。そこで本授業は，非言語的コミュニケーションの契機や媒体として「Art and Culture」の諸相を捉え直すことを目的とした。

■概要

本授業では，全15回のうち，第 5 ～ 7 回の授業で授業担当者である門前がアート制作を実施した（指墨画･フロッタージュとコラージュ･インスタレーション）。また，第12，13回に，アーティストである櫻井が，外部講師として特別授業を行った（オンライン講義・アトリエにおける制作）。本稿はこの計 5 回を考察の対象とする。

第 5 ～ 7 回の制作回と，第12，13回の制作回では，受講生のアート経験の質的な違いを意識した。前者の通常回では，学生自身が作ることを重視し，授業者は冒頭の講義と課題共有のみ行い，自身の制作論やアート観を積極的に伝えることはしなかった。対して，後者の特別授業では，授業者はアーティストとして自身の作品を紹介し，制作観を自身の言葉で伝えた。

なお，本稿の考察では，第 5 ～ 7 回に関しては,倫理的配慮の下，受講生の提出物や活動記録写真，レポート等の授業内課題からの長文引用は控え，主に授業者の授業計画と活動記録メモ，授業内課題の部分引用をもとに考察す

る。第12，13回の特別授業に関しては，共同研究協力と資料提供の手続きを経たため，学生から提出された写真や成果物の写真，事後アンケートの記述を参照する。

今回検討する制作回に先立ち，第１～４回授業では，教材としてアートに関する文献（2023年度は主に先述の髙橋(2022)の一部抜粋）と，その内容に関するスライド資料を準備した。[5]授業の前半に，古紙（包装紙やお菓子のパッケージ）等を使い，問いに応じてグループで平面的なアウトプットを行うなど制作機会を設け，授業後半には，活動や鑑賞の内容を自身の言葉でまとめる記述課題を行った。

3. 授業内課題としてのアート制作

3-1. 第５回「指墨画」

■実施日：2023年５月19日（金）天気：晴れ

■テーマ：Play with lines and dots

■教材：A４コピー用紙（80枚程度），習字用の水書き用紙（半紙サイズ40枚・大型版６枚），紙コップ（水入れ），水，指墨画紹介のレジュメ（日本語・英語表記）

■授業の流れ：

・概要説明（レジュメ）

・個別制作（約30分）

各自の机上にA４コピー用紙２枚，水書き用紙（半紙サイズ）１枚，紙コップ１個を配布し，コピー用紙にはシャーペン・鉛筆等で，水書き用紙には指で，それぞれ自由に「線」「点」を描き，双方の描線・描点の特徴と感覚を比較した。

・アンケート課題①（鉛筆・ペン等と指で描いた線・点を比較し，描かれたものや描く際の身体感覚について気づきや感想をまとめるもの）

・グループ制作（約40分）[6]

くじ引きで４～５名のグループに分かれ，60×90cmの大型の水書き用紙に指で自由に描画した。

・アンケート課題②（グループ制作の感想をまとめるもの）

■考察

今回の制作意図は，第一に文房具で線・点を描く感覚と，指で描く感覚の違いを捉えること，第二に，指墨画のままならなさを体感し，その感覚を言葉にすることを目標とした。とくに二つ目の点に関しては，事前にレジュメを配布し，指墨画の手法を駆使した文人画の先行作品をいくつか鑑賞し，趣向・洒脱さ・無作為性などに注意を向けた。

①　アート制作の過程

まず，レジュメで基本的な知識・情報と，江戸時代の文人画家・池大雅（1723～1776年）による作品を共有した。その後，一人ずつA４コピー用紙を２枚，半紙サイズの水書き用紙を１枚，水入れ用の紙コップを１個ずつ配布した。

制作はそれぞれのやり方で，コピー用紙のうち１枚にシャーペン・鉛筆等の文房具，半紙サイズの水書き用紙には指で自由に「線」「点」を描いてもらった。双方の描線・描点の特徴と感覚を比較し，もう１枚の紙に，線・点の質，手の動き，力の入り方，手や指の使い方などについて気づいたことをメモしながら進めた。

②　素材や成果物の質・肌理

コピー用紙の描線・描点に関しては，シャープペンシルやボールペンを用いる学生が多かった。描線にはぐるぐる，ギザギザなど単調な繰り返しの表現，描点では細かく刻むような動きが比較的多く見られた。線も点も，文房具では思い通り，スムーズに運び，中には何かの形を具体的に描く描画行為が見られた。

水描き用紙は，時間が経つと線や点が自然に滲み，乾いて消えるという特性があるため，思い通りの描画は難しそうだった。水の量により線や点の濃さや大きさ，太さ等が変化する点は，教材の特性によるもので，想定したものではなかったが，学生のアンケート回答には，点や線を描いてから消えるまでの経過を見続けら

れる，といった用紙の特性に対する関心も寄せられた。

アンケート①の感想では，描線・描点の意図を「ダイレクト」に現す文房具に比べ，瞬間ごと「思いもよらない表現」を見せる水描き用紙の描線･描点に「いびつ（歪）」,「躍動感」,「面白」,「味わい」といった言葉が宛てられた。「線と点だけの単純」さに「アートの新鮮さを感じた」という，自身のアート観に関する感想もあった。

③　制作や成果物によって引き出される感覚・身体性

個人制作では，指で描くという不慣れな行為に戸惑う様子，不自然さを楽しむ様子，注意深く見つめる様子，苦戦，制作を放棄したような姿勢，指で水をはじくなどラフな表現などが見られた。水描き用紙へ描くことの“放棄（あきらめ）”が何人かに見られた点は印象的だった。ただ，描くことをやめた後も，アンケートに回答しながら他の学生の描画を見たり，自身の紙の滲みを見つめたり，紙面の変化に関心を寄せている様子だった。

グループ制作では，多くのグループがテーマを決めて描き始めていたが，次第に即興的な表現が多く出てきた。最終的に“落書き”調になっている様子も見られた。ただ，アンケート②に対する学生コメントからは，そうした発散的な表現を行ったグループの学生は，描くことの行為自体に満足感を表しており，ひらめいた事柄を指でなぞりかたちにすること自体を楽しんでいたことがうかがえた。

3-2. 第 6 回「フロッタージュ・コラージュ」

■実施日：2023年 5 月26日（金）天気：晴れ

■テーマ：Touch the textures

■教材：クーピー，クレヨン，パステル，A 4 コピー用紙（150枚程度），模造紙，フロッタージュ・コラージュ紹介のスライド（日本語・英語表記），関連Webサイト

■授業の流れ：

・概要説明（スライド，Webサイト）

・個別制作（約30分）：フロッタージュ

(1)G館校舎・敷地内で面白いと感じる質感や文様を見つけ，A 4 用紙にフロッタージュを行う（触れられるものは手触り，物質としての肌理を確かめる）

(2)採取した質感に対し，手触りや見た目をもとにその文様の名称を英語で考え，紙面に記す

(3)採取したフロッタージュの写真（英語名称付き）を数点選び，dotCampusに投稿・提出してオンライン共有（相互閲覧）

・グループ制作（約40分）：コラージュ

くじで 4 ～ 5 名のグループに分かれ，それぞれに集めてきたフロッタージュを持ち寄り，効果的に切り貼りして模造紙上に配置した。各グループで，それぞれの模様が活きる構成を考え制作した（テーマ設定の有無や制作の方法はグループ内で自由に決めてもらう）。

・アンケート課題（一連の制作の感想をまとめるもの）

■考察

今回の制作意図は，髙橋(2022)とその論拠であるインゴルドの議論によって焦点化される，環境・世界の「肌理」「ざらつき」を身体的に理解することとした（活動前に簡単に文献との関連を説明した）。

まず，フロッタージュで環境の肌理を採取し，身の回りの模様や感触を焦点化した。また，そのパターンに英語で名称（他者に共有されるような特徴を掴む名前）を付けることで，客観的な触覚的情報を自身の理解や身体感覚に引き寄せ共有する機会とした。

コラージュはグループ制作として行い，他の受講生が採取してきたフロッタージュとコラボレーションし，特徴を生かし合いながら一つの表現が成されるようにした。

①　アート制作の過程

フロッタージュでは，個別にモノの表面をこ

すり取る作業を通し，黙々と環境と対話していた。提出されたパターンとその名称の組み合わせはどれも個性的で，オノマトペや食べ物など，感覚に訴えるものが多かった。模様の名付けには，各自の世界の切り取り方が表れていた。

コラージュでは，フロッタージュで採取した模様を寄せ集めることで，制作が進むにつれ，紙面には相乗効果による説得力や個性が生まれていた。アンケート回答からは，事前に「お菓子」「Wi-Fiマーク」などテーマを決めて制作したグループで，紙片を合わせる過程で二つの物の見方―制作物全体の印象を総合的に作っていく側面と，逆に全体に合わせるなかで紙片の表現が再発見される側面―が生じていたことがうかがえた。

② 素材や成果物の質・肌理

フロッタージュでは，手を動かしながらモノの肌理や強度を見出して行く手つきが，何かの採集家や実験者のようだった。いつも過ごしており知っているはずの場所へ，視野を絞ってシンプルな行為を繰り返し没入することで，様々な驚きや再発見があったようだ。環境やモノの質感や感触の複雑さ，多様さに「驚いた」，「発見（した）」という言葉がアンケートに多く見られた。なかには，「同じ模様でも色によって見え方が異なる」と分析的なコメントもあった。

コラージュのグループ制作では，のりとハサミを人数分準備できなかったため，多くの学生が手でちぎって模造紙に貼り付けた。そのために，作品は全体的に，どのグループもとても有機的な見た目となった。比較的，即興的でひらめきを試していくような制作の仕方が目立っており，模様を組み合わせるなか「（自分の模様が他の人の見立てにより思いがけず）役に立っているのをみると嬉しかった」，「考え方次第で…に見えることができました」など，ユニークなコメントも見られた。

③ 制作や成果物によって引き出される感覚・身体性

フロッタージュでは，一人ひとり，あるいは数名のグループで，散策的に，自由に肌理を採取して回っている姿が印象的だった。また，思いがけない模様が現れることを楽しみ，他の受講生の表現に興味をもつ様子や記述が多かった。

一方，コラージュでは，初対面の人を含むグループ制作で，タイムリミットがあったためか，アンケートには「It was hard to decide…」や「we managed to…」という，先を展望することや状況に応じることに対する試行錯誤のあとが読み取れた。環境・世界の断片を寄せ集め，組み合わせるグループ作業は，表現が刻々と変化するため，言語以前の即興的な感覚が刺激される様子だった。また，自身で意図的に描いたものではない，モノの凸凹の跡を素材として作る体験により，「broaden the scope of my art」という自身のアート観の変化を示す感想もあった。

3-3. 第７回「インスタレーション」

■実施日：2023年６月２日（金）天気：雨

■テーマ：Installation

■教材：モノA～Dの素材モチーフ，インスタレーション紹介のスライド（日本語･英語表記）

モノA　前回の制作物（コラージュ作品）

モノB　キャンバス布（約２m×４m）生地

モノC　紙コップ（約40個）

モノD　紙類（包装紙、雑誌類、パッケージ等）

※CとDは加工可とした

※その他、適宜私物を交えて撮影可

■授業の流れ：

・概要説明（スライド）

・個別制作orグループ制作（約40分）

(1)A～Dのモノのいずれかを用い，個別あるいはグループで，G館校舎・敷地内で２～３点のインスタレーションを行う。

＊私物，校舎内の備品，人物（了承を得る），授業用カーゴ内の文具等，モチーフを追加してもOK。

(2)設置したインスタレーションの写真撮影を行う。

(3)撮影した作品のうち 1 点を，英語キャプションとともにdotCampusに投稿・提出し，オンラインで共有（相互閲覧）

■考察

今回の制作意図は，モノと空間のアレンジにより，自分自身が作る感覚というよりも，自身が素材や他者とともに在る場所の表現に関わる感覚を体験することとした。学生には事前の概要説明で，モノを配置することで「場所の見え方，風景を変える」という点を，制作のポイントとして共有した。

① アート制作の過程

学生はまず，備品とモノA～Dを各自で確認し，モチーフを検討した。個別・グループ制作のいずれも可能だったため，友達同士で相談しながら分担してモチーフを選ぶ様子もあった。当日は大雨で，屋外に出るために傘を準備したり，モチーフに合わせてどこへ移動するのが良いか事前に相談したりする計画的な様子もあった。

時間が経ち何回か撮影を終えると，モチーフを交換しに戻ってくる学生が多かった。他の学生の設置・撮影の様子を見て触発されたり，いいなと感じたモチーフを探したり借りたりする様子もあった。

② 素材や成果物の質・肌理

今回授業者は，基本的に教室で待機し，適宜備品の調整や配達をしていた。そのため，提出写真とそのキャプションを踏まえ，以下の検討を行う。

主なモチーフとして，私物のキーホルダーやぬいぐるみ，校舎内の備品や日常風景とコラボレーションした作品が多かった。自身や友人の姿を取り込んだ表現も比較的多く見られた。なかには，撮影写真をモノクロにして将来に対する不安を表現する作品，日常生活の疲弊感を投影した作品もあり，他の制作回に比べ，大学生の等身大の問題意識や心情が反映されている印象を受けた。

授業用カート内の備品に関しては，ハサミを擬人化したり，英字新聞を身にまとったり，様々な見立てが試みられた。

撮影された写真の空間構成としては，モチーフや場所の傾き・偏りを活かした表現，モチーフとテーマのアンバランスさを捉えた表現，モチーフにフォーカスした遠近の工夫，モチーフの関係性や物語に合わせた場面の切り取り方など，多様な意匠が見られた。また，モチーフの特性から物語を生んだ独創的な表現（当日に降っていた雨･トイレットペーパー･バルコニーの大型観賞樹を組み合わせ，「人間による使用を拒み自然に還る紙」を表現），既存の館内アート作品との身体的なコラボレーション（館内に設置された大理石アート作品の歪曲した部分に，パンチする自身のこぶしポーズを組み合わせたもの）などもあった。

③ 制作や成果物によって引き出される感覚・身体性

②の通り，今回は学生の制作風景と作品を現地で共有・鑑賞することができなかったため，③に関する記述は割愛する。（門前）

4. 外部講師による特別授業

ここからは特別授業を担当した櫻井が代わって記述する。まず，「Art and Culture」という科目における特別授業の位置づけとねらいについて確認しておきたい。

この特別授業は先述の共同研究のもと，「非芸術系大学における科目にアート作品の制作を取り入れる」ことを目指した授業モデル作成のために実施されたものである。ここでの「科目」とは，通常アート制作を行うことのない総合大学の各学部における専門科目，あるいは全

学共通の基礎教養科目などを想定している。そこで本年度は国際文化学科対象の専門科目として門前が担当する本科目で櫻井が特別授業を実施し，一方全学共通の教養科目としては，共同研究者である寺嶋が担当する「哲学」において三好が特別授業を実施することに決定した。

こうした経緯から，当初櫻井としては普段アート制作を行うことのない学生たちがアート制作に触れる機会として特別授業を想定していた。しかしArt and Cultureにおいては，すでに門前がアート制作を取り入れた授業を複数回にわたって実施していため，その流れで自身が「アーティスト」という肩書のもとに特別授業を行うことの意味を，より強く意識することとなった。

門前とも検討した結果，通常授業における制作回との差別化を図るために，後の一般化を前提として誰にでも汎用可能なモデルとすることに注力するよりも，自分自身のアーティストとしての個人的な制作実感に深く基づいた実践にすることを意識して，モデルを作成する方針とした。そのため，事前に自身の制作や思考について学生に共有した方がより効果的ではないかと話し合い，制作回の前にオンラインで講義を行うことになった。

4-1. アーティストの言葉（第12回オンライン講義）

■実施日：2023年７月14日（金）
■授業者：櫻井，進行：門前
■参加者：25名
※当日は，学生は通常教室に集まり，オンライン講義として実施した
■授業の流れ
・講師紹介
・オンライン講義（約60分）
10：35～　講師紹介・あいさつ
10：40頃～11：40頃　講義
・質疑応答（約20分）
・アンケート（約10分）
・第13回ワークショップ（対面制作）の主旨説明・承諾書記入
■講義内容

スライドを用いて，櫻井の経歴と代表作品の画像を紹介した後に，自身が制作しながら思考していることについて講義を行った。

私は街を歩きながら撮影した写真をもとに，和紙と日本画の顔料や箔を用いて絵画を制作している。モチーフとなるのは，偶然出会い，通り過ぎていった人々や，誰も目に留めない日常の風景の断片である。一見すると写実的な画風であるが，偶然性を取り入れながら，実際とは異なる色やマチエールを重ねて描いている。和紙に箔や顔料を重ねては洗い落とし，また重ねていく作業は，自分と他者との距離を探ることに似ている。写真の景色は必然的に特定の時間や場所や記憶に紐づけられているが，それらは描いていく画面上で流動しながら積層していくレイヤー越しに，「いつかどこかにありえた／ありうる」匿名の景色へと変容し，この世界に存在する無数の物語と呼応していると感じられる。

このように，筆者の制作においては現実に出会って心惹かれた「実景」と，それを記録した「写真」と，それらをもとに生成していく「絵画」が重要な軸になっており，この３つの関係性と差異をめぐる問いが近年の筆者の制作における重要な関心でもあることにも触れた。2022年からは，絵画制作の過程で写真製版によるシルクスクリーンの技法を用いることで，自分にとっての「写真」と「絵画」の境界をより深く探る試みに取り組んでいる。そして最初にシルクスクリーンに取り組んだ新潟県長岡市での滞在制作[7]について紹介するなかで，長岡の街を歩き，写真を撮りながら思考したことについて触れた。

２月の長岡は一面が雪に覆われており，その白い世界のなかで街にあるものがところどこ

ろ顔を出している様子を見て，私は世界が「虫食い」になっていると感じた。そして 3 月に再び訪れたとき，街は雪が融けるまで見えなかった，雪が融けたからこそ出会えるようになった景色に満ちていた。錆色の地面，雪に埋もれ使えなかったベンチ，公園をかけまわる保育園児たち。そんな光景を眺めながら，私はこんなことを考えていた。「春になれば，また同じような光景に出会えるに違いないと，私たちはどうして信じることができるのだろう。どうして雪の下にあるものが，いつも同じだと言い切れるだろう。いつか世界が一変し，それらは失われてしまうのかもしれない」と。[8]

図 1 の絵画はこの滞在をもとに制作した一連の作品の一つである。[9]それは 3 月に撮影した一枚の写真を写しとって描いたものであるが，私にとっては雪に覆われた 2 月を含む，長岡の様々な時間と場所が重層的に内包されたフィクションの景色であるとともに，長岡のみならず，常に変化し続けるこの世界そのものの流動性や未規定性についての普遍的なメタファーでもある。

図 1「behind snow」72.7×116.7cm，2022

このように，筆者は自分の制作について語ることを通して，自分にとって（そしておそらく多くのアーティストにとって）制作とは手を動かして作品を作っているときだけを指すのではなく，日々のなかで見たものや思考したことも含まれていること，そしてそれは「イメージしたものを思いのままに表す」という意味での「自己表現」ではなく，自分とその外側にある世界や「もの」（絵具や紙などの素材），つまり「他者」との関わりのなかで，自分の意図を超えて事後的に生成していくものであるという感覚を共有しようと試みた。

また後半では，私立小学校での図工指導，および短期大学の保育者養成科目での造形表現指導という二つの現場[10]での実践例を紹介しながら，「アーティストを目指さない人が美術制作を学ぶこと」の意味について，ものを媒介に自分や他者や世界と出会い直し，その複雑さに気づくことや，脱線を繰り返しながら新たな問いが連鎖的に立ち上がっていくことなどにあるのではないか，などの考えを例示した。そこから次週に行う活動のねらい（次節で詳述）につなげ，実践への導入とした。

講義後に15分ほど取られた質疑応答では，「上手くなるにはどうすればよいか」，「図工の指導で気を付けていることや，「評価すること」の難しさについてどう考えているのか」という二つの質問があった[11]。活発な質疑に加え，講義後に書かれた授業コメントでも長文での感想が多く，学生たちの講義への関心の高さが伺えた。

4-2. アトリエで自ら作る（第13回対面制作）

本授業は，共同研究の「学部専門科目用モデル」を適用して実施した。[12]

■実施日：2023年 7 月21日（金）天気：晴れ
■授業者：櫻井，進行・補助：門前，動画・写真撮影：三好，趣旨説明・補助：寺嶋
■参加者：34名（2 名欠席・実験参加同意者33名），事後アンケート回答者26名（回答率79%）
■場所：金沢星稜大学・ピアッツァ工房
■テーマ：「色とともに出会う世界」
■ねらい

この実践では事前講義で述べたような櫻井の制作観を内容に反映し，その感覚を学生に共有

することを意識しつつ，こちらの予想を超える出来事が生じる余白もあるような内容にしたいと考えた。また，門前の制作回では汚れやすさや扱いにくさなどの面から絵具を使用することが難しかったため，今回は積極的に絵具を使用することとした。

授業の対象は，国際文化学科の学生で異文化交流に関心が高い学生たちである。だが遠くの異文化を理解する以前に，ごく身近な他者や世界のこと，さらには自分自身のことを，私たちは理解しているといえるのだろうか。多面的で複雑な存在を安易に「理解している」という思い込みは，むしろその外側にあるものを切り捨てることにつながりかねない。小さな紙に色をつけ，大学構内で写真をとる活動を通して，世界の見え方が刻々と変化していく様子を体験するとともに，自己や他者への新たな発見が立ち上がることをねらいとした。

■教材

3 ㎝四方の画用紙，5 ㎝四方の画用紙：一人10枚程度，水入れ・水彩絵具（固形タイプ）：班に一つ，絵筆：一人数本，新聞紙，透明プラスチックコップ・4 cm角の透明プラスチックケース：一人一つ，作品提出場所に敷く黒布

■活動内容

1. 小さな正方形の白画用紙（3 cm 角と 5 cm 角を用意）に，水彩絵の具で色をつける（枚数は自由）
2. プラスチックの使い捨てコップに入れ，教室の外に持ち出し，透明ケースに入れるなどして，作品に合う場所に置いて写真を撮る
3. 写真を共有し，教員がコメントする

■授業の流れ（90分）

・導入（10分）

班ごと（4 人程度）に着席，画材配布。挨拶，水汲み，新聞紙を敷いた上に紙を置く。

・制作（30分）

(1) 紙は平らのまま，そのまま絵具をつけてみる。具体的な絵を描く必要はなく，にじみを利用しながら様々な色の組み合わせを試すことを投げかける。ドリッピング技法も紹介。

(2) 紙に折り目をつけたり，ぐしゃぐしゃにしたりすることで，立体的な作品に変化することを示す。さらに絵具をつけたり，別の形にしてもよいと投げかける。

・写真撮影（30分）

(1) 透明ケースについて紹介し，作品をこの中に入れると見え方が変化することを示す。

(2) プラコップに入れた作品とケースとスマホを持って外に出る。

(3) 作品が似合いそうな場所に作品を置き，写真を撮る（枚数制限なし。作品はそのまま置いても，手に持っても，透明ケースやコップに入れてもよい）。

・鑑賞（15分）

(1) 戻った人から，写真を 1 枚選んでデータを提出する（残りの写真は，別途一人10枚まで提出を促した）。写真投稿が終わった学生から，適宜アンケート課題に回答。

(2) 集まった写真を画面に映し，鑑賞する。

(3) 作品本体は黒布を敷いた机に集めて並べ，鑑賞する。

・まとめ・片づけ（5 分）

図 2 制作風景

図 3 制作物①

図 4 制作物②

■考察

普段使用しない絵具を用いた活動に対し，学生が最初は躊躇するのではないかと想定していたが，実際はとてもスムーズに，思い思いに制作に取り組み始め，グループで談笑しながらも手を動かし，ときおり真剣な表情に切り替わってそれぞれの制作に集中する様子が見られた。

図 5 提出写真①

図 6 提出写真②

手を止めて紙を見つめ思考をめぐらすフェーズと，ためらいなく手を動かしながら新しい紙に手が伸びていくフェーズとを繰り返す様子が印象的だった。描き方についてはにじみやドリッピング，無造作な折り目による，偶然を生かした抽象的な表現を中心に例示したが，それに留まらない技法や思いがけない発想の表現も多く見られた（指に絵具をつけて描く，風景やモナリザなど具体的なイメージを描く，できた紙で折り紙を折るなど）。

スムーズに進んだ要因としては，これまでの通常制作回での経験が生きていたことや，事前講義で今回の制作の背景にある筆者の制作観が共有されたことの影響があったと考えられる。すぐに描き上がりそうな紙のサイズに加えて，使用する枚数の制限がなかったことも，失敗を恐れずに色々試しても大丈夫という安心感につながったのではないか。また，今回は制作会場が普段の講義室とは異なり，制作に適した設計のピアッツァ工房（こども学科で主に使用される，いわゆる図工室）であったことも，制作意欲の刺激につながったのではないか。工房内では，学生それぞれのこだわりが作品にこめられつつ，他の学生の表現を認め合い，そこから触発されて新たな描き方を試すなど，自由な制作を保障しあう肯定的な空気感が醸成されていると感じた。

外に出て写真撮影をする段階では，作品とともに見慣れた大学周辺をあらためて眺める姿，

発見した環境を生かした撮影に取り組む姿が見られた。今回の工房は1階にあり，扉から出るとまず，造形活動用とみられる屋外水道の存在が目を惹く。そこから中庭や，キャンパスの裏を流れる緑豊かな金腐川へもアクセスしやすく，アイデアを触発するような周辺環境に恵まれていたことも影響したと考えられる。

作品はそのまま置いたり手に持ったり，複数作品を組み合わたり，透明ケースやプラコップに入れたりするだけでなく，水道の水をかける，コップに水を入れて作品を浮かべる，空中に放り投げる，作品で顔を隠す，身体を使ってアクロバットなポーズとともに撮影するなど，予想を超えた発想の作品も見られた。また，同じ作品を使っていても，組み合わせを変えたり，置き方や撮る場所を変えたりしながら，様々なパターンの写真を撮る姿が多く見られた。一人で黙々と作業する学生もいれば，グループで和やかに協力しながら進める学生もいたが，いずれも撮影の際には真剣な表情で撮り方を吟味する様子が伺えた。

スライドを使った写真鑑賞では，一人1枚ずつの作品しか共有できなかったが，その他の作品にも興味深いものが多く含まれていた。鑑賞時間を削って制作を延長したため，写真を見る時間は短く，意見交換を行うこともできなかった。作品の現物は，撮影が早く終わった学生から黒布の上に並べていき，鑑賞した。黒布の効果で作品がまた異なる表情を見せたことが印象的だったが，この鑑賞もあまり時間をとることができず，授業終了後の退出前に軽く眺めただけの学生も見受けられた。制作・撮影の時間を通して，近くにいる学生同士で互いの作品を鑑賞しあう様子は見られていたものの，最後に振り返りとして深い鑑賞の時間をとれなかったことは反省点である。

事後アンケートでは，全体的に肯定的な感想が多く見られた。「自由に楽しめた」，「思い切り自分を表現できた」などの率直な感想が多かったが，なかにはアートのイメージの変化（「上手く描くことが重要」や「独創性がないと面白くない」などから，「些細なものでもアートになりうる」「苦手意識が薄れた」などへ），世界の見え方の変化や多様性の発見（「多様で正解はない」「組み合わせ次第で違う見え方になる」「自分の新しい一面を見つけることができる」），過程の重要性への気づき（「考えている時間が楽しい＝時間もアート」「その過程や描くこと自体に意味があり、自由に楽しむことが大切」），制作を通した他者理解（「周りを見ると皆な自分には思いつかないような写真の撮り方や工夫をして挑んでいたので観察することが楽しかった」）などへの言及も見られた。これらの肯定的なコメントは必ずしも今回の特別授業単体に対してのものではなく，Art and Cultureという授業全体での経験の影響も少なからずあると考えられる。

授業にアート制作を取り入れることについても肯定的な意見が多かった。「普段考えないことや思い浮かばないこと，他人の発想などに触れることのできる機会」「創造性が豊かになる契機」「自分以外の発想を得たい場合や他の観点から物事を見ることができる」などの学びの機会として捉えるコメントのほか，「気分転換」「生活を華やかにする」など，楽しさを理由とする率直なコメントも見られた。

少なくとも，今回の授業を「楽しい」と感じた学生が多かったことから，アートに親しむ機会としては授業が成功したといえるだろう。しかしそれが感情的な発散やレクリエーションで終わるのではなく，知的で持続的な探究として，それぞれの専攻や科目におけるテーマや，学生それぞれの研究に通じる個人的な問いとの接面を探っていくにはどうしたらよいかが考えることが，今後の課題となるだろう。

また，アンケートの回答は全体的に事前講義後の授業コメントに比べると短文が多く，具体的な記述や深い考察は少ない印象であった。回

答時間の短さや，似たような質問項目が多かったことも原因となったと考えられるが，それ以上に，アンケートの回答が授業の評価外であり，学生にとっての重要度が低かったことが影響したように思われる。

また，門前担当の制作回では，授業後のコメントのほかにも制作過程で思考を言語化する機会があり，体験と思考とを往還しながら制作に取り組んでいたが，今回の特別授業ではそうした機会を設けておらず，学生の思考を知る手がかりが事後アンケートのみに限られてしまった。こうした反省点から，2024年 3 月に「ゼミ科目用モデル」として少人数の希望者を対象に行ったワークショップでは，制作の途中で考えたことについて発表の場を設ける，思考のメモを付箋に書き作品の一部にするといった，思考と制作との往還を重視する内容で行った（ワークショップの詳細は寺嶋（2005）を参照）。（櫻井）

5. 授業内でアート制作を行う意味

以上，本稿は，本学人文学部専門科目「Art and Culture」（2023年度）の 5 回の実践を，アート制作による学習の様子と学生によるふり返りに沿って考察してきた。さいごに，総合大学の授業にアート制作を導入することの意義と課題について考えてみたい。

本授業は、人文学部国際文化学科の専門科目として，アート制作の経験を通し，異質な文化との交流や新たな文化創出の素地となり得る視点や感覚を培うことをめざした。授業構成の特色は，通常授業の制作回でアートを構造的に体験し，特別授業でのアーティストとの交流を介して，「制作する」という行為の内側からアートを追体験的に学ぶ点に見出される。

具体的には，通常授業の制作回（第 5 ～ 7 回）で，「制作する」という所作や行為の感覚的なウォーミングアップを行った。そして，後半の外部講師の特別授業（第12，13回）では，第12回の講義回でアーティストの言葉を通じて「制作する」ということの姿勢と視点を共有した。そのうえで，第13回の制作回で，自ら手を動かし，作品を作ることで，自身の環境をアート制作を介して見渡す機会とした。

以下，「Art and Culture」がアート制作を取り込むことで可能となった学びについてまとめておきたい。

本授業において，アート制作を通して学ぶ意味の一つ目は，制作が引き出す表現的で身体的なモノや素材との対話と，環境に没入して行くような自由で探索的なものの見方に見出される。そうした経験は，自身や自分たちにとって気になるもの，関心を引く事柄に対し，意味的な理解や説明的な認識以前のところで関わり，そうした関わりの仕方を以て互いを再認識することにつながる。第13回特別授業のアンケート（問 5「印象的だったこと」）では，「何かを作り上げることが苦手だったけど，やっていくうちに，こうすれば綺麗に発色するなとかがだんだんわかってきて楽しかったです」というコメントがあった。とりあえず何かをやってみるなか，そこから見えてくることや他者の動き，反応，環境からの限定作用を受け，それらをアレンジしながら表現し返す。こうしたアート制作の特質は，新たな物事やその変化に対し，注意深く，柔軟に応答する感覚を培い得るのではないだろうか。

また二つ目の意味としては，アートと文化の連関を考える授業目的の下，大勢の他の受講生とともに制作的な機会をもつことで，言語による説明的，断定的な認識とは異なる物事の認識が可能となったと考えられる。第13回特別授業の制作回では，「他の人の作品を見た時，ユニークな色遣いや幾何学的な模様を描いた作品が印象に残った」「水を使った写真をとっている人がいて，水は液体なので形を変えやすく，その一瞬でしかとれない写真が撮れるので面白いと思った」など，他の受講生の所作や身振り

に触発されたという感想が比較的多く見られた。そこでは，他者の試み的な身振りにより新たなアイデアを得たり，自身の試みに対する他者からの反応を受け新たな表現を試したりという，関係性や出来事にひらかれた寛容な関わりがあったと考えられる。それは，単に他を受け入れるという受動的な寛容性ではなく，多様性や流動性のうちで自らのこだわりや意欲的な側面が刺激される，創造的な経験だったのではないだろうか。

三つ目の意味としては，外部講師としてアーティストを召喚することで，一般的には特殊で特別な営みと解されがちなアート制作を，より身近に，さらには日常生活と地続きのものとして捉え直すことになったと考えられる。今回は第12，13回で，アーティストの言葉や制作観と対話し，作品制作の姿勢に触れる機会を設けた。第12回の事後アンケートからは，多くの受講生が自身とアーティストの感覚の違い，ものの見方の差異を意識したことがうかがえた。そのうえで，翌週に自ら制作してみるなか，第13回アンケートでは，「少し汚い場所もアートになりうる」（問５）「技術を極めるための授業ではなく，いろいろな種類の芸術にアンテナを張り巡らせて楽しむことができると感じた」（問７）など，何人かの受講生が，自身のうちにアーティスト的な視点や身振りを見出していた。

以上のように，制作的な認識や思考の下に他者と関わり合うという授業内アート特有のコミュニケーションは，単に協力的，協働的であることとはまた別の，違いや異質さを保ち合うかたちでの言外の呼応関係を含む。たとえば，課題に則して言えば，線を引く，点を打つ，紙を貼り付けるといったシンプルな所作が意味を生じ，それが他者間で共有されるなかで相互への関心や理解が生じていくような，行為遂行的な関係性の生成である。こうした関係性のうちで科目のエッセンスや目標に迫ることができる点が，総合大学の科目にアート制作を導入することの意義と言えるのではないだろうか。

ただ今回は，専門科目のテーマがアート・芸術に関するものであり，科目のねらいがアート制作の特性と重なり合っていた。他の科目の専門性にアート制作の導入を可能にするには，さらなる検討が必要である。この点に関しては，2023年度後期開講の教養科目「哲学」（担当者：寺嶋）に三好がアーティストとして関わる試みが実施され，授業モデルの検証が進められている（詳細は寺嶋（2025）を参照）。

さらに，課題点としては，制作の成果物や作品を成績に反映するのか否か，反映するとすればどのような規準を設けることが望ましいのかといった評価の方法について，今回は詳細な検討ができなかった。本授業では，通常授業は，成果物や制作過程ではなく，活動の様子とそのふり返りアンケート，期末の「最終レポート」を評価対象とした（授業意図と重なりつつ観点を独自に掘り下げる記述や，逆に授業者が想定していなかった独創的な試み・記述をとくに評価した）。対して，特別授業の制作回では，成果物も事後アンケートも成績評価の対象とはしなかった。

総合大学における授業内アートでは，制作物の技巧ではなく，制作過程における思考の深さが評価対象となる。そこで，制作活動やその成果物を評価対象にする場合には，それらに関して言語化した記述を評価せざるを得ないだろう。その際の評価規準を学生へ明確に提示し，言語化しきれない感覚についてもできるだけ言語化を試みるように促しながら，かつ，記述された内容を手がかりに，言語ですくい切れないような体験の質を制作過程や作品から読み取る複合的な評価が求められる。そこで，実践と思考全体を通したポートフォリオ評価が一つの有効な方策と考えられる。そのうえで，制作を楽しんで終わりとならないよう，常に制作と思考を往還しながら記述を重ねていくことのできる

授業設計が必要となる。

また，制作回の課題構成に関しても,今後の検討事項が残された。芸術・工芸系の専門ではない教員が，担当教科の目標やテーマに適うかたちでいかにアート制作を課題化するのか，アーティストと協働するとすれば，授業の目的を事前にどの程度共有するかなど，留意点の多さが浮き彫りとなった。とくに，アートの即興性や探索性を活かすうえで，活動や指示に関する授業計画を事前にどの程度すり合わせるかについては，科目の専門性や目標に合わせ検討する必要があると考えられる。

さいごに，少数ではあるが，第13回アンケート（問７）で，大学授業の課題としてアート制作の導入は「あまりいらないと思った」という意見があった。芸術・工芸系のテーマではない教養科目や専門科目で，個人によっては関心のない，あるいは苦手意識をもっている可能性もあるアート制作を導入する是非については，さらなる検討が必要である。

今回明らかとなった課題点を踏まえ，アーティストになるための専門技術の習得でも，教員養成のための教材研究でもない，総合大学の授業内におけるアート制作の可能性を今後も探っていきたい。（門前・櫻井）

本稿は，2023年度学内共同研究「Arts-Based Researchを共通基盤とし，非芸術系大学における科目にアート作品の制作を取り入れるための学際的研究―芸術学・教育学・哲学の観点から―」（櫻井あすみ，三好風太，寺嶋雅彦，門前斐紀，研究代表者：寺嶋雅彦）の助成を受けた。また，研究に協力していただいた2023年度人文学部専門科目「Art and Culture」受講生に心より感謝申し上げる。

引用（または参考）文献

アートコミュニケーションプロジェクトCHIPS (https://chipsblog.tumblr.com/about_chips 2024/08/20参照

今井康雄（2021）『モノの経験の教育学――アート制作から人間形成論へ』東京大学出版会。

笠原広一（2019）「Arts-Based Researchによる美術教育研究の可能性について――その成立の背景と歴史及び国内外の研究動向の概況から」美術科教育学会『美術教育学』第40号，113-128。

――（2022）「アートベース・リサーチによる芸術教育研究の可能性――成立の背景と歴史および国内外の研究動向の概況から（ver.2）」笠原広一・小松佳代子・生井良司編（2022）『アートベース・リサーチがひらく教育の実践と理論――ABRから始まる探究（1）高等教育編』学術研究出版

笠原広一，リタ・L・アーウィン編（2022）『アートグラフィー――芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法』学術研究出版。

金田卓也（2014）「教育に関する質的研究におけるArts-Based Researchの可能性」日本ホリスティック教育協会『ホリスティック教育研究』第17号，1-16。

クラウス・モレンハウアー著，真壁宏幹・今井康雄訳（2001）『子どもは美をどう体験するか――美的人間形成の根本問題』玉川大学出版部。

小松佳代子編（2011）「つくることと生きること――美術と教育の交叉」東京藝術大学美術教育研究室編『美術と教育のあいだ』東京藝術大学出版会。

――（2018）『美術教育の可能性――作品制作と芸術的省察』勁草書房。

――（2023）『アートベース・リサーチの可能性：制作・研究・教育をつなぐ』勁草書房。

髙橋憲人（2022）『環境が芸術になるとき――肌理の芸術論』春秋社。

寺嶋雅彦（2025）「総合大学でアート制作を授業に導入する試みはいかにして可能か――四つの授業モデルの提示を通じて」『金沢星稜大学人文学研究』第９号，1-28頁。

東京大学芸術創造連携研究機構ACUTE(https://www.art.c.u-tokyo.ac.jp)2024/06/14

西村拓生（2021）『「美と教育」という謎――プリズムとしてのシラー『美育書簡』』東京大学出版会。

渡辺哲男・山名淳ほか編（2019）『言葉とアートをつなぐ教育思想』晃洋書房。

Knutson. K., Okada, T., &, Crowley, K. (Eds.). (2022). *Multidisciplinary approaches to art learning and creativity: Fostering artistic exploration in formal and informal settings,* New York and London: Routledge.

Leavy, P. (2020). *Method Meets Art: Arts-Based Research Practice (3 rd Edition)*, New York: The Guilford Press.

付録

表 1　第13回（特別授業の制作回）事後アンケート（回答者26名）

質問項目	解答（④以降は一部抜粋）
①小学校～高校まで，美術（図工）の授業は好きでしたか？選択肢からどれか一つ選んでください。	とても好き　8 名 どちらかというと好き　9 名 どちらでもない　2 名 どちらかというと嫌い　6 名 とても嫌い　1 名
②これまでに，教育機関における授業以外で，アート作品の制作をしたことがありますか？選択肢からどちらかを選択してください。	ある　6 名 ない　20名
③問 2 で「ある」とお答えした方に伺います。どのようなアート作品を制作しましたか？	・小学生の頃なので詳しく覚えていないですが，色から動物の輪郭を作る事をしていました。 ・油絵 ・九谷焼，ミュージックビデオ制作，映画製作，写真，デジタルアート ・編み物 ・タイルを木の板に貼って鍋敷きを作った。 ・Painting.
④アート作品の制作活動を行っている間に感じたこと，考えたこと，気づいたことを（できるだけたくさん）挙げてください。	・友だちの作品を見てアートは本当に多様で正解はないんだなと感じた。 ・アートは楽しむことが大切アートは自分を表現する手段のひとつ自由に楽しむことができる ・I felt calm and soothed and really enjoyed the whole thing! ・光の入り加減，置く場所，背景など作品は周りの影響を受けてあたかも全く違う作品かのように変わる。 ・発想力やイメージが大切だと感じた。また，その時その時で感性や見方が変わるので偶然性というものもアートと関連していることに気づいた。 ・自分の感覚や勘に任せてみること ・少し汚い場所も作品になる組み合わせ次第で違う見え方になる。考えている時間が楽しい＝時間もアート。 ・制作した作品を写真で納める時間に周りを見ると皆な自分には思いつかないような写真の撮り方や工夫をして挑んでいたので観察することが楽しかった。
⑤制作作をふり返って，とくに印象的だったこと，感想をまとめてください。	・無の感情でもアートは作れる ・This gave me the opportunity to create my own artwork，which I cherish very much and enjoy the process very much ・透明の四角いケースに入れるだけで，一つのアート作品のようになったことが印象的だった。また，みんなが撮った写真も全部違くて新しい見方を知ることができた。 ・意外とアイデアが出てこなくて困った。 ・紙をぐちゃぐちゃにしてから色を塗るというのが，斬新だなと思った。 ・写真を撮る際に水に入れて撮っている人がいたことが印象的だった。 ・同じ紙と絵の具を使用しても，人それぞれで個性が出ていて面白いと感じた。また，自由に描いていたら想像とは違った作品ができていたりして，その部分が印象的でした。 ・I think color matching is very important，so I thought long and hard about matching harmonious colors. ・Free. ・何かを作り上げることが苦手だったけど，やっていくうちに，こうすれば綺麗に発色するなとかがだんだんわかってきて楽しかったです。他の人のつくったものをみて，こういうこともできるんだという自分にはない発想がたくさんあってすごく面白かったです。

⑥これまで美術・アートにどんなイメージを持っていましたか。また，今回の制作を通してそのイメージに変化はありましたか。	・今までは自分に想像力がないからアートには苦手意識があったが，何を作ろうと深く考えなくてもアートが作れることに気付き，嬉しかった。 ・アートは自由に楽しむことができ，自分を表現するものであると考えていても，どうしても完成が大事だと思っていましたが，今回の制作を通して，完成した作品だけではなく，その過程や描くこと自体に意味があり，自由に楽しむことが大切であると感じました。 ・Before I thought art was elegant and comforting，now I think it empties the mind and relieves stress. ・一人で作るイメージだったけれど，他の人のアイデアや考えを取り入れて，みんなで作る物もあるんだ ・今までは絵が上手い人が既存のものをいかに本物に近づけて描けるか表現できるかが重要だと思っていたが，今回は全く見本やお手本がない状態で作品を作ってみて，美術はその時の発想次第で気まぐれに変化するので，自由奔放なイメージに変わった。 ・独創的に作品を制作するというイメージを持っていました。制作を通して改めてそう思いました。 ・独創性がないと面白くないというイメージがあったが，身近な些細なものでもアートになりうるということに気づき，苦手意識が薄れた。 ・絵のセンスが自分にはないのでやるとなると億劫→楽しかった ・美術・アートにはアーティストの制作する多様な意思の上で形となっていて，それを読み取ったり感じ取るものであるという考えがあったが，今回，制作を通して制の手元や言葉や形としては残らない空気感といった制作する過程も人々に美術・アートとして見せられる作中場面なのではないかと感じた。
⑦今回の試みのように，芸術系の専攻を持たない大学の科目において，アート作品の制作を取り入れることに関し，どのように考えますか。	・専門でない学生が取り組む事で生まれる味もあるのではないかなと思う。そこから生まれる多角的な考え方も面白い。 ・なかなかアートなどに触れる機会がないので，今回のような体験ができるのはすごくいい機会だと思いました。普段考えないことや思い浮かばないこと，他人の発想などに触れることのできる機会なので，取り入れるべきだと思いました。 ・I believe that incorporating unusual "art" into the classroom will refresh students and stimulate a variety of ideas. ・技術を極めるための授業ではなく，いろいろな種類の芸術にアンテナを張り巡らせて楽しむことができると感じた。昔した活動を思い出したり，自己表現できたり，創造性が豊かになる契機になると思った。 ・あまりいらないと思った。 ・授業が楽しいので良いと思います。 ・芸術は誰でも楽しめるもので，自分の新しい一面を見つけることができるので賛成 ・気分転換の一つになってとても良いと思う。 ・芸術を得意としていない人たちだからこそ作れるものがあると思うので，とてもいい試みだと思います。 ・人それぞれ感覚が違っていて新しい発想を得ることができたので自分以外の発想を得たい場合や他の観点から物事を見ることができるいい機会になると思う。 ・机に向かって文字と戦う以外の時間・感覚を得ることは生活を華やかにするので必要だと思う。

注

(1) 本稿の第 4 章は，2024年 7 月6-7日（土日）に大阪公立大学中百舌鳥キャンパスで開催された，日本ホリスティック教育／ケア学会第 7 回研究大会における門前の個人発表「総合大学の学生が美術制作に触れる意味：ABRがもたらすアート体験の教育人間学的考察」に基づく。

(2) 総合大学の授業と芸術・アートのプロジェクトのコラボレーションとしては，「ジャンルを超えたり，交えたり，壊したり，つくり変えたり」する芸術の特性を活かし，様々な研究分野の先端知を社会（学内・学外）に共有するACUT（Art Center，The University of Tokyo：東京大学芸術創造連携研究機構）の分野融合型の取り組みや，教育学部美術科の専門ゼミと普通科目の受講生，および関連ネットワークが連携し，アートを通した地域還元型の教育活動を実施した千葉大学のCHIPS（Chiba University Pure Spirits）等の活動がある。

(3) 本授業は，初年の2020年度構想時より，身近な素材を用いたアートワークを想定していた。しかし，新型コロナウィルスの影響で，2022年度までは制作的な活動を実施できていなかった。2023年度は，共同研究のABRを意識して道具を充実させ，3 回の制作回を設けた。第 5 ～ 7 回の制作内容は，担当者である門前の研究等に基づいて決定した（大学院修了後，教育大学の美術教育専修講座の研究生として平面制作と美術教育を学び，その後，博物館の教育普及補佐として展示鑑賞用のワークショップ運営に携わった）。制作回の有無による学習の変化については，今後機会を改めて検討してみたい。

(4) 櫻井と三好は小松の指導生であり，その意味で本研究は「アート研究としてのABR」の枠組みを，総合大学の教養科目・専門科目（芸術教育や芸術・工芸系の実技クラスではない科目）に導入したものと言える。

(5) スライド資料は基本的に英語表記とした。内容は，知識や情報を伝えるというよりも，先行研究で概観したような教育哲学的な観点を踏まえ，アート制作の感覚から日常生活を見渡したり，文化との関連を考えたりすることを重視した。

(6) グループ制作では，制作の直前にくじでグループ分けを行い，4 ～ 5 名ほどのグループで一つの成果物を制作した。その際，留学生を各グループに 1，2 名ずつ割り当て交流を図った。

(7) 「工房このすく Arts-Based Research labo & HANGA studio」で行われたアーティスト・イン・レジデンスを指す。このレジデンスは美術制作の過程における探究を地域の人々に開示することを目的に行われた。滞在制作自体は早春の2022年 3 月21日から27日までであったが，2 月にも下見のために長岡を訪れており，雪に覆われた街の写真を撮影していた。

(8) この長岡での話は，雪国出身者も多い金沢の学生にとって印象深かったようで，授業後に提出された感想コメントでも，この問いに触発されたコメントがいくつか見受けられた。例えば，「先生が言っていたが，雪に潰れた草が春には復活することが当たり前だと思っていたが，この当たり前が突然覆ることを考えず春が来るものだと考えてしまっている自分がいた事に驚いた」，「世界のある部分，あるいは，全てが失われてしまうかもしれないことをアートにおいて残すということは，日常的にあるものは変わらないだろうという固定概念を持ってしまっている中では制作が始まらないだろうと感じた」，「雪がたくさん降って普通は見えるところが雪で隠れて虫食いみたいになっていたという表現が面白かったです。僕は富山県出身で雪が多く，生まれた時からその光景が普通だったのでその光景を見てもその思考に至らないなと思ったので僕も多方面から物事を見たり考えたりして作品の発想を得る事ができたら良いなと思いました」などのコメントが見られた。

(9) この「behind snow」シリーズは，2022年10月から12月まで小山市立車屋美術館で開催された，「Articulation 区切りと生成」展の後期展示で展示された。本展覧会は14名のアーティストによる，アーティストのＡＢＲの開示を目的とした展覧会であり，本共同研究の共同研究者である三好風太も参加した。

(10) 櫻井は2019年度から現在まで星野学園小学校非常講師として図工を教えており，2021から2022年度までは川口短期大学こども学科非常勤講師として保育者養成科目の図画工作も担当した。なお，2024年度からは江戸川大学こどもコミュニケーション学科で同じく保育者養成科目の造形表現および絵画表現の授業を担当している。

(11) 一つ目の質問に関しては，「上手い」というのがどのようなことを指すかによること，「いい絵」と「技巧的に優れている絵」は必ずしも一致しないことを返答したところ，学生は自身も制作意欲があるらしく，目指しているものが「自分らしい，味のあるデザイン」のことであると質問意図を省察していた。二つ目の質問に関しては，目標からの脱線を許容しながら，子どもたちに制作の過程をまず楽しんでほしいと考えているが，集団生活における規律の指導が求められ，定められた目標の達成が評価規準となる学校教育において，そうした子どもたちの姿を評価することの難しさについて返答した。質問学生は，「表現が自由であるがために同じ評価スケールにのらない個人差・個人の持ち味を，どう評価する

のか気になった」と質問意図を返してくれた。それに対して，次週の制作では大学における授業の自由さ（今回の特別授業は成績評価外でもあった）を活かし，色々と試してみてほしい,「気づいた」や「できた」をたくさん集めてほしいと伝えた。

（12） 以下，本節は本紀要に掲載の寺嶋論文と内容が一部重複している（寺嶋,2025）。